

## 『英和对訳袖珍辞書』における異体字の考察

三好 彰

キーワード： 英和对訳袖珍辞書 薩摩辞書 漢字 異体字

### 要旨

『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）は市販された最初の英和辞書である。そしてその原稿の一部が残っている。本辞書は改訂を繰り返したが最終版は『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）である。

原稿は手書き（手稿）であり、『英和对訳袖珍辞書』の英語部は活版印刷であるが日本語部は木版印刷である。そして『大正増補 和訳英辞林』は英語部も日本語部も活版印刷である。日本語の表現が手書き、木版印刷、活版印刷と三様であることに着目し、漢字の異体字の異動を検証した。

手稿、『英和对訳袖珍辞書』と『大正増補 和訳英辞林』の三者の間で異体字が使い分けられていることがある。この場合には手稿と『英和对訳袖珍辞書』とは同形の文字を使い、『大正増補 和訳英辞林』ではその異体字を使うケースが多い。

手稿、『英和对訳袖珍辞書』と『大正増補 和訳英辞林』のそれぞれの中で漢字とその異体字が混用されているケースでは、その件数がこの順に減っていることが分かった。

これらのことから手稿では異体字の混用の意識が薄かったが、木版印刷の『英和对訳袖珍辞書』で少し絞り込み、活版印刷の大正増補 和訳英辞林』では大幅に絞り込んでおり、印刷技法が文字セットに影響を与えている実態が浮き上がってきた。

### 1. はじめに

日本で市販された最初の英和辞書は文久2（西暦 1862）年に刊行された『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）である。本辞書の英語部は活版印刷であり日本語部は木版印刷である。同じ印刷構成で慶応2（西暦 1866）に『改正増補 英和对訳袖珍辞書』（堀越亀之助編 1866）が出された。次いで翌年に英語も木版印刷にした『改正増補 英和对訳袖珍辞書』（堀越亀之助編 1867）が出版され、その2年後に増刷版『改正増補 英和对訳袖珍辞書』（堀越亀之助編 1869）が出版された。

そして『改正増補 英和对訳袖珍辞書』（堀越亀之助編 1866）を基にし、見出し語を数百語増補した『改正増補 和訳英辞書』（高橋新吉 1869）が明治2年（西暦 1869）に刊行され、さらに数千語増補した『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）が明治4年（西暦 1871）に出た。両辞書は薩摩藩の学生が印刷を上海で行ったことで薩摩辞書とも呼ばれるが、

英語部も日本語部も活版印刷であった。『改正増補 和訳英辞書』（高橋新吉 1869）と『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）の表題部に英語でそれぞれ『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）の The Third Edition, The Fourth Edition と刻されている。これ以降に『英和对訳袖珍辞書』の改訂版は出ていない。

さて平成 19 年（西暦 2007）に『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）と『改正増補 英和对訳袖珍辞書』（堀越亀之助編 1867）の原稿の一部が発見された（名雲純一編 2007）。特に注目すべきは手書きの『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）草稿である。発見されたのは辞書全体の 30 分の 1 であるが、朱に染まった手稿は校正の実態を生々しく伝えている。この手稿の中に校正に当たった日付が書かれており、関連史料から文久元年（西暦 1861）であることが判明した（三好 2007）。以下では、この原稿を『手稿』（1861）と略称する。

本稿では『手稿』（1861）と、それに対応する部分の木版印刷された『英和对訳袖珍辞書』初版（堀達之助編 1862）および活版印刷された『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）において、日本語の表現が手書きの文字、木版印刷と活版印刷の三様であることに着目し、それぞれにおいて漢字の異体字が使われている実態を示し比較し考察する。

なお『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）の見出し語数は約 35,000 であり、『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）は約 39,000 である（三好 2016:e4）である。『手稿』（1861）の見出し語数は校正の段階で追加と削除があるがほぼ 1,200 語である（堀・三好 2010:5）。

『手稿』（1861）から『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）へ、そして『改正増補 英和对訳袖珍辞書』（堀越亀之助編 1866）から『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）への改版にあたり見出し語の追加と削除がなされているが、それらを除いて本稿では『手稿』（1861）と『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）および『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）に共通の見出し語 1,144 語についてその邦訳部で使われている漢字の異体字を考察する。

参照の便のために以下では、『手稿』（1861）と見出し語が共通な部分の『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編 1862）を『袖珍辞書』（1862）、当該の『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）を『薩摩辞書』（1871）と略称する。なお薩摩辞書は漢字にルビが付されているが、本稿では煩雑さを避けてルビを省くことを断っておく。

ところで『手稿』（1861）の邦訳は刊本である『袖珍辞書』（1862）のそれとかなり異なっているので、校正原稿ではあるが最終稿ではない（堀・三好 2010:190）。





## 2. 異体字とその調べ方

### 2.1 異体字の調べ方

筆者は『手稿』（1861）、『袖珍辞書』（1862）および『薩摩辞書』（1871）をパソコン上に翻刻した。つまりパソコン上にこれらの一連の辞書の写本を作り上げた。

写本を作る上で異体字に留意した。異体字を考察する上で東京大学史料編纂所のデータベース異体字同定一覧を参考とした。本稿では、この一覧に示されている親字と異体字をもとに考察する。なお、この一覧に出ていない文字が『手稿』（1861）、『袖珍辞書』（1862）および『薩

摩辞書』(1871)に出ているので、これらについても考察する。

なお手書き文字である『手稿』(1861)と木版印刷である『袖珍辞書』(1862)で崩し字が多用されているが、崩し字は独立の異体字とは見なさず、東京大学史料編纂所のデータベース異体字同定一覧にある文字に対応させた。たとえば『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)で崩し字の  が多用され、一部で  が使われているが、 は為の崩し字であり、 は為の崩し字である。そして東京大学史料編纂所のデータベース異体字同定一覧で為は親字であり、爲は為の異体字である。

## 2.2 検討対象の親字と異体字

『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)および『薩摩辞書』(1871)の三者間での親字と異体字の異動について考察する。つまり、或る親字とその異体字が『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のいずれにも出てくるケースを取り上げる。言い換えると『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)、『薩摩辞書』(1871)のどれかで当該の漢字が使われていないケースは取り上げない。また『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)の三者間で、同じ漢字(親字ないし異体字)が使われていてその漢字に異動が無いケースも取り上げない。

たとえば、『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)で「兎」を使い、『薩摩辞書』(1871)で「兎」を使っているように異体字の異動があるケースは取り扱う。しかし『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)で「區」を使っているが「区」を使っていないような異体字の異動が無いケースは検討の対象としない。また『手稿』(1861)で「従」を使い、『薩摩辞書』(1871)で「従」を使っているが、『袖珍辞書』(1862)では「従」も「従」も使っていないケースは検討の対象としない。

なお手稿は朱が入れられて校正の状況が分かるわけだが、朱で消された漢字は検討の対象としない。

## 3. 『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)における異体字の異動の考察

『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)で異体字に異動が見られるケースを3つに分けて論ずる。

最初に『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のそれぞれの辞書内では親字、異体字の混用が見られないが、3者間で混用が見られるケースを3.1で論ずる。

次に『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のそれぞれの辞書のうち少なくとも一つの辞書内に於いて親字、異体字の混用が見られるケースを3.2で述べる。

最後に東京大学史料編纂所データベース異体字同定一覧に出ていない漢字を含むケースを3.3で取り上げる。

『手稿』(1861)では漢字の書き易さ、『袖珍辞書』(1862)では木版の彫り易さ、そして『薩摩辞書』(1871)では活版の作り易さが頭に浮かぶが、実態はどうであろうか。

### 3.1 『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)の三者間で異体字を混用

『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のそれぞれの辞書内では親字、異体字の混用が見られないが、3者間をまたがって混用が見られるケースが66件ある。

たとえば『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)で「飲」が使われているが「飲」が使われていない。そして逆に『薩摩辞書』(1871)では「飲」は使われておらず「飲」が使われている。その1例として見出し語 Diet-drink, s. (s.は品詞「実名詞」の略号)の邦訳を以下に示す。

|              |          |
|--------------|----------|
| 『手稿』(1861)   | 薬用ニナル飲薬剂 |
| 『袖珍辞書』(1862) | 薬用ニナル飲剂  |
| 『薩摩辞書』(1871) | 薬用ニナル飲剂  |

ここで「飲」が、東京大学史料編纂所のデータベース異体字同定一覧で親字であり、「飲」がその異体字である。さらに Diet-drink, s. の例では「飲」と「飲」のほかに、「薬」と「薬」および「剂」と「劑」にも親字と異体字の異動がみられる。

この66件を『手稿』(1861)で見ると「飲」のような親字が55種使われていて、残りの11種は親字でなく異体字が使われている。『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)について同じように分類し親字と異体字の混用状況として表1に示す。

表1: 『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)間での異体字の混用状況

|        | 『手稿』(1861) | 『袖珍辞書』(1862) | 『薩摩辞書』(1871) |
|--------|------------|--------------|--------------|
| 親字の個数  | 55         | 54           | 7            |
| 異体字の個数 | 11         | 12           | 59           |

表1から『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)では今回の観察対象に限れば親字が多用されていて、『薩摩辞書』(1871)では異体字の方が多用されていることが分かる。上述した「飲」と「飲」もその一例である。

なお東京大学史料編纂所のデータベース異体字同定一覧の親字は原則として漢字 JIS コードの若い番号を取っていて新字と旧字の分類によるものではない。本稿では混乱を避けるために新字、旧字での区別をしないでおく。

手書きである『手稿』(1861)と手で彫り上げる木版印刷の『袖珍辞書』(1862)は書き易い/彫り易い比較的画数の少ない親字を使い、活版印刷の『薩摩辞書』(1871)では画数の多い異体字を使ったためと考えられる。

上述したように「飲」は『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)で使われており、『薩摩辞書』(1871)で「飲」が使われている。このように『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)で親字が使われ、『薩摩辞書』(1871)で異体字が使われているケースが45件ある。「飲」と「飲」のケースを「飲⇒飲⇒飲」と書くことにして他の45件を東京大学史料編纂所データベース異体字同定一覧の順に以下に列挙する。

悪⇒悪⇒悪、衛⇒衛⇒衛、塩⇒塩⇒鹽、画⇒画⇒畫、懷⇒懷⇒壞、覺⇒覺⇒覺、  
 楽⇒楽⇒樂、卷⇒卷⇒卷、戯⇒戯⇒戲、虚⇒虚⇒虛、顛⇒顛⇒顯、黒⇒黒⇒黒、  
 歳⇒歳⇒歲、兎⇒兎⇒兒、獸⇒獸⇒獸、焼⇒焼⇒燒、状⇒状⇒狀、釀⇒釀⇒釀、  
 真⇒真⇒眞、尽⇒尽⇒盡、清⇒清⇒清、静⇒静⇒清、説⇒説⇒説、双⇒双⇒雙、  
 争⇒争⇒爭、窓⇒窓⇒窗、達⇒達⇒達、禱⇒禱⇒禱、廢⇒廢⇒廢、剥⇒剥⇒剥、  
 拔⇒拔⇒拔、変⇒変⇒變、歩⇒歩⇒歩、宝⇒宝⇒寶、俛⇒俛⇒儘、満⇒満⇒滿、

葉→葉→葉、様→様→様、来→来→來、乱→乱→亂、齡→齡→齡、歴→歴→歴、  
 蠟→蠟→蠟、録→録→録、産→産→産

次に多いケースは『手稿』(1861)が異体字で『袖珍辞書』(1862)が親字であって『薩摩辞書』(1871)が異体字である下記の7件である。

圍→圉→圍、棧→棧→棧、聲→声→聲、賤→賤→賤、續→続→續、邊→辺→邊、  
 沒→没→沒

その次に多いケースは『手稿』(1861)が親字で『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)が異体字である下記の6件である。

挙→擧→擧、鼠→鼠→鼠、帶→帶→帶、滯→滯→滯、腸→腸→腸、拜→拜→拜  
 (註: 鼠は鼠の俗字だがパソコンに入っていない書体なので影印で示す。)

残りは、『手稿』(1861)が親字で『袖珍辞書』(1862)で異体字で『薩摩辞書』(1871)が親字である3ケース、『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)が異体字で『薩摩辞書』(1871)が親字である3ケース、および『手稿』(1861)が異体字で『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)が親字である1ケースである。これらをまとめて下記に記す。

質→質→質、余→餘→余、留→留→留 陰→陰→陰、囧→囧→回、罰→罰→罰、  
 哥→歌→歌

### 3.2 『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のどれかが異体字を混用

『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のどれかが一辞書内で親字と異体字の2字体を混用しているケースが41件あり、3字体を混用しているケースが4件ある。

#### 3.2.1 親字と異体字の2字体を混用

##### (a) 『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)がいずれも異体字を混用

『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のいずれもが親字と異体字を混用しているケースが7件ある。その1例を挙げると、親字の「裸」とその異体字である「裸」がともに『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)、『薩摩辞書』(1871)の3つのそれぞれに於いて混用されている。その用例として Denudation, s. と Nakedness s. s. の邦訳を以下に示す。

|                 |              |                    |
|-----------------|--------------|--------------------|
| Denudation, s.  | 『手稿』(1861)   | 裸ニナス事              |
|                 | 『袖珍辞書』(1862) | 裸ニナス㇇ <sup>1</sup> |
|                 | 『薩摩辞書』(1871) | 裸ニナス㇇              |
| Nakedness s. s. | 『手稿』(1861)   | 赤裸ナル㇇、守ナキ㇇、ムキ出シナル㇇ |
|                 | 『袖珍辞書』(1862) | 赤裸ナル㇇、ムキ出シナル㇇      |
|                 | 『薩摩辞書』(1871) | 赤裸ナル㇇、ムキ出シナル㇇      |

<sup>1</sup> 「㇇」は仮名の「コ」と「ト」の合せ字である。動詞や形容詞の名詞表現の際に㇇が使われるので、『手稿』(1861)の「裸ニナス事」を『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)では「裸ニナス㇇」に直している。なお『薩摩辞書』は上海で活版印刷されたがカタカナや合せ字の活字を鑄造した。

さて、このような混用を「裸：裸」と書くことにして、他の6件を書き上げると次の通りである。

棄：弃、減：減、場：場、船：船、同：仝、仏：佛

この7ケースはいずれも同じ見出し語の邦訳の間では親字／異体字の異動は見られない。しかし、これらの7組の漢字が異体字の関係にあることを『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)および『薩摩辞書』(1871)の関係者が認識していなかったことは考えにくい。同一辞書内で同じ字体を一貫して用いようとする意識が薄かったようだ。

#### (b) 『手稿』(1861) だけが異体字を混用

『手稿』(1861) が親字と異体字を混用しているが、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)は混用していないケースが18件ある。1例を挙げると、『手稿』(1861)は「国」と「國」を混用しているが、『袖珍辞書』(1862)は「国」を使い「國」を使っておらず、『薩摩辞書』(1871)は「国」を使わず「國」を使っている。その用例を Denizen, s. と Department, s. で示すと次のようである。

|                |              |                    |
|----------------|--------------|--------------------|
| Denizen, s.    | 『手稿』(1861)   | 「シチセンシブ」ヲ許サレテ居ル異国人 |
|                | 『袖珍辞書』(1862) | 「シチセンシブ」ヲ許サレテ居ル異国人 |
|                | 『薩摩辞書』(1871) | シチセンシブヲ許サレテ居ル異國人   |
| Department, s. | 『手稿』(1861)   | 部分ケ、國ノ分チ           |
|                | 『袖珍辞書』(1862) | 職分、部分ケ、国ノ分チ        |
|                | 『薩摩辞書』(1871) | 職分、部分ケ、國ノ分チ        |

『手稿』(1861) から『袖珍辞書』(1862)さらに『薩摩辞書』(1871)の「国」と「國」の使い分けを、実態に沿って「国と國⇒国⇒國」と書くこととし、他の17件をこの形式で以下に列挙する。

残と殘⇒残⇒殘、囟と圖⇒囟⇒圖、戦と戰⇒戦⇒戰、銭と錢⇒銭⇒錢、属と屬⇒属⇒屬、  
点と點⇒点⇒點、与と與⇒与⇒與、氣と氣⇒氣⇒氣、齒と齒⇒齒⇒齒、洪と滂⇒洪⇒滂、  
雑と雜⇒雑⇒雜、釈と釋⇒釋⇒釋、触と觸⇒觸⇒觸、高と高⇒高⇒高、飾と飭⇒飾⇒飾、  
解と解⇒解⇒解、昼と晝⇒昼⇒晝

#### (c) 『手稿』(1861) ならびに『袖珍辞書』(1862)ないし『薩摩辞書』(1871)が異体字を混用

『手稿』(1861) が親字と異体字を混用しているが、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のどちらかで混用していないケースが5件ある。1例を挙げると、『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)は「処」とその異体字である「處」を混用しているが、『薩摩辞書』(1871)は「處」を使っていて「処」を使っていない。その用例を見出し語 Dairy, s. と Nadir, s. の邦訳で以下に示す。

|           |              |                                  |
|-----------|--------------|----------------------------------|
| Dairy, s. | 『手稿』(1861)   | 乳汁ヲ收メ置ク処、乳汁ヲ製スル処                 |
|           | 『袖珍辞書』(1862) | 乳汁ヲ收メ置ク処、乳汁ヲ製スル処                 |
|           | 『薩摩辞書』(1871) | 乳汁ヲ收メ置ク處、乳汁ヲ製スル處                 |
| Nadir, s. | 『手稿』(1861)   | 人ノ直立シテ胯下ニ當ル處 <small>星学/語</small> |

『袖珍辞書』(1862) 人ノ直立シテ胯下ニ當ル處 星字/語

『薩摩辞書』(1871) 人ノ直立シテ胯下ニ當ル處 (星學/語)

「処」と「處」のほかの4件を以下に列挙する。

当と當⇒当と當⇒當、発と發⇒発と發⇒發、鬱と鬱⇒鬱と鬱

## (d) 『袖珍辞書』(1862)ないし『薩摩辞書』(1871)が異体字を混用

『手稿』(1861)は親字と異体字を混用していないが、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のどちらかで親字と異体字を混用しているケースが11件ある。1例を挙げると、『手稿』(1861)と『薩摩辞書』(1871)は「濕」を使っているが「湿」は使っていない。そして『袖珍辞書』(1862)は「湿」と「濕」を使っている。その用例を見出し語 Dank, adj. と Damp, s. の邦訳で以下に示す。

|            |              |  |
|------------|--------------|--|
| Dank, adj. | 『手稿』(1861)   | 濕リタル   |
|            | 『袖珍辞書』(1862) | 湿リタル   |
|            | 『薩摩辞書』(1871) | 濕リタル   |
| Damp, s.   | 『手稿』(1861)   | 蒸氣 <sub>又霧</sub> <sub>又氣</sub> ノ引キタタズニ居ル事 <sub>又濕氣</sub> |
|            | 『袖珍辞書』(1862) | 蒸氣、霧、鬱氣、濕氣   |
|            | 『薩摩辞書』(1871) | 蒸氣、霧、鬱氣、濕氣   |

その他の10件を以下に示す。

應⇒応と應⇒應、強⇒強と強⇒強、無⇒無と无⇒無、澤⇒沢⇒沢と澤、頼⇒頼と頼⇒頼、禮⇒礼と禮⇒禮、告⇒告と告⇒告、筭⇒筭と算⇒算、称⇒称⇒称と稱、織⇒織⇒織と織  
なお織と織は親字「織」の異体字である。つまり親字「織」は『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)で使われていない。

## 3.2.2 親字と異体字の3字体を混用

『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)が親字／異体字を3種使っているケースが次のように4件ある。

## (a) 親字「学」とその異体字

『手稿』(1861)は「学」と「學」を使い、『袖珍辞書』(1862)は「学」、そして『薩摩辞書』(1871)は「學」を使っている。

このケースについての用例の1つを Satellite, s. の邦訳で示すと、次の通りである。

『手稿』(1861) 王ヲ補佐スル役人。衛星 星字。『袖珍辞書』(1862) 補佐ノ役人、衛星 星字

『薩摩辞書』(1871) 従者、月、衛星 (星學ノ語)

## (b) 親字「体」とその異体字

『手稿』(1861)は「体」と「躰」を使い、『袖珍辞書』(1862)は「体」、そして『薩摩辞書』(1871)は「體」を使っている。

## (c) 親字「弁」とその異体字

『手稿』(1861)は「弁」と「瓣」を使い、『袖珍辞書』(1862)は「辨」、そして『薩

摩辞書』(1871)は「瓣」を使っている。辨と瓣は別の異体字である。

(d) 親字「劍」の異体字

『手稿』(1861)は「劔」と「劍」を使い、『袖珍辞書』(1862)は「劔」と「劔」、そして『薩摩辞書』(1871)は「劍」と3種の異体字を使っている。しかし親字「劍」は使われていない。

3.2.3 親字と異体字

『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のどれかが親字と異体字を混用しているケースを論じてきたが、ここで『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)および『薩摩辞書』(1871)で使われている親字と異体字の個数をまとめて表2に示す。

表2: 『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)での異体字の混用状況

|        | 『手稿』(1861) | 『袖珍辞書』(1862) | 『薩摩辞書』(1871) |
|--------|------------|--------------|--------------|
| 親字の個数  | 38         | 38           | 16           |
| 異体字の個数 | 42         | 28           | 40           |
| 計      | 80         | 64           | 56           |

『薩摩辞書』(1871)では親字の使われる比率が大幅に下がっている。これは表1と同じ傾向である。

3.3 東京大学史料編纂所データベース異体字同定一覧に出ていない漢字を含むケース

東京大学史料編纂所データベース異体字同定一覧に出ていない漢字を含む12のケースがある。たとえば『手稿』(1861)で親字「間」とともに「间」が使われているが、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)では「間」である。この「间」が東京大学史料編纂所データベース異体字同定一覧に出ていない漢字である。この用例を Diaphragm, s. の邦訳で示すと次のようである。

『手稿』(1861)            胸ト腹トノ间ニアル膜 横隔膜トイフ  
 『袖珍辞書』(1862)       胸ト腹トノ間ニアル膜 隔膜トイフ  
 『薩摩辞書』(1871)       胸ト腹トノ間ニアル膜 隔膜トイフ

『手稿』(1861)から『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)への親字/異体字の異動を「間と间⇒間⇒間」と書くことにし他の11ケースを以下に列挙する。

间⇒聞⇒聞、鉄⇒鉄⇒鉄、为⇒為⇒為、劳と勞⇒勞⇒勞、勢と勢⇒勢と勢⇒勢、  
 實⇒實と実⇒實、熱⇒熱と热⇒熱、羅⇒羅と罗⇒羅、類⇒類⇒類と类、別⇒別と別⇒別、  
 事と事と亼⇒事と事⇒事

ここで鉄は「やじり、するどい」を意味する漢字であるが、日本では鉄の俗字として使われている。

東京大学史料編纂所データベース異体字同定一覧は事の異体字として「亼」を挙げていて「亼」が入っていない。しかし鎌田・米山(2011)には事の亼とともに亼も古字として採録されている。



なお「實⇒實と実⇒實」のケースでは親字の「実」が使われていない。

#### 4. 『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)、『薩摩辞書』(1871)内での親字／異体字の混用

『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)で見られる異体字の異動について3章で述べたが、それをもとにして『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)のそれぞれの中で親字／異体字が混用されているケースをまとめると次のようになる。

- (a) 『手稿』(1861)、『袖珍辞書』(1862)と『薩摩辞書』(1871)共通に親字と異体字を混用  
8組：棄と弃、減と減、称と稱、場と場、船と舩、同と仝、仏と佛、裸と裸
- (b) 『手稿』(1861)と『袖珍辞書』(1862)で共通に親字と異体字の混用  
5組：剂と剂、処と處、当と當、発と發、事と事  
なお『手稿』(1861)は「事と事」のほかに「亓」を使っている。
- (c) 『手稿』(1861)と『薩摩辞書』(1871)で共通に親字と異体字を混用  
1組：鬱と鬱
- (d) 『手稿』(1861)のみでの親字と異体字の混用  
25組：国と國、残と殘、図と圖、戦と戰、銭と錢、属と屬、点と點、与と與、气と氣、  
齒と齒、洩と滲、雑と雜、积と釋、触と觸、高と高、飾と飭、解と解、昼と晝、  
学と學、体と軀、弁と瓣、間と間、劳と勞、勢と勢、劔と劍
- (e) 『袖珍辞書』(1862)のみでの親字と異体字の混用  
14組：応と應、強と強、湿と濕、無と无、頼と頼、礼と禮、告と告、算と算、實と实、  
熱と熱、羅と罗、別と別、劔と劍、勢と勢
- (f) 『薩摩辞書』(1871)のみでの親字と異体字の混用  
3組：沢と澤、織と織、類と类

このことから、『手稿』(1861)では(a),(b),(c),(d)の総計の39組、『袖珍辞書』(1862)では(a),(b),(e)の総計の27組、そして『薩摩辞書』(1871)では(a),(c),(f)の総計の12組の親字／異体字が使われていることが分かる。手書きである『手稿』(1861)の編纂者は異体字について問題意識が薄かったようだが、『袖珍辞書』(1862)で木版印刷にするにあたり彫り易さの観点で一部について整理し、上海の印刷所で『薩摩辞書』(1871)を活版印刷する際に大幅な整理をしたことが推測される。

『英和对訳袖珍辞書』の異体字についての先行研究が知られていて、管見と断って70種の異体字があるとして表にまとめている(杉本つとむ編 1981:p.826)。この表では異体字を『英和对訳袖珍辞書』の影印で示しているが、それには崩し字と見なせるものが少なくない。

#### 5. まとめ

『英和对訳袖珍辞書』(堀達之助編 1862)、その手書き原稿(手稿)、および改訂増補版である『大正増補 和訳英辞林』(前田正毅・高橋良昭編 1871)における漢字の異体字を東京大学史料編纂所データベース異体字同定一覧に基いて考察した。

漢字については手稿は手書きであり、それが『英和对訳袖珍辞書』(堀達之助編 1862)での木版印刷へ、そして『大正増補 和訳英辞林』(前田正毅・高橋良昭編 1871)での活版印刷

へと変り三様で表現されている。

『手稿』(1861)は『英和对訳袖珍辞書』全体の30分の1でしかない。それでも漢字の表現法が『手稿』(1861)の手書き、『袖珍辞書』(1862)の木版印刷、そして『薩摩辞書』(1871)の活版印刷へと変るにつれて使われている異体字の種類が減っている実態を明らかにすることができた。

### 参考文献

- 堀孝彦・三好彰編 (2010) 『解説『英和对訳袖珍辞書』原稿 初版および再版』鎌倉：港の人。
- 堀達之助編 (1862) 『英和对訳袖珍辞書』江戸：洋書調所。
- 堀越亀之助編 (1866) 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』江戸：開成所。
- 堀越亀之助編 (1867) 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』江戸：開成所。
- 堀越亀之助編 (1869) 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』東京：藏田屋清右衛門。
- 鎌田正・米山寅太郎 (2011) 『新漢語林』 第2版。東京：大修館書店。
- 前田正毅・高橋良昭編 (1871) 『大正増補 和訳英辞林』上海：American Presbyterian Mission Press。
- 三好彰 (2007) 「新発見『英和对訳袖珍辞書』の草稿および校正原稿の考察」『英学史研究』40: 87-103.
- 三好彰 (2011) 「宮崎元立と英学」『研究紀要』(佐賀大学地域学歴史文化研究センター) 5: 34-43.
- 三好彰 (2012) 「『英和对訳袖珍辞書』の編纂過程の考察」『洋学史研究』29: 34-49.
- 三好彰 (2016) 「薩摩辞書の編纂法の考察」『東京大学言語学論集 電子版』37: e1-e18.
- 名雲純一編 (2007) 『英和对訳袖珍辞書 原稿影印』高崎：名雲書店。
- 杉本つとむ編 (1981) 『江戸時代 翻訳日本語辞典』東京：早稲田大学。
- 高橋新吉 (1869) 『改正増補 和訳英辞書』上海：American Presbyterian Mission Press。

# Considerations on Variant Kanji Characters of the First Commercial English-Japanese Dictionary

Akira Miyoshi

**Keywords:** The Commercial English-Japanese dictionary in the Edo Period in Japan,  
Kanji and its Variants

## Abstract

The first commercial English-Japanese dictionary was published in 1862, and its partial manuscript is existent. The dictionary has been revised several times, and its final edition was published in 1871.

This paper comparatively discusses usage of Kanji character variants in three documents; namely, the handwritten manuscript, the first dictionary of woodblock printing and the final one of letterpress printing.

In cases where a set of Kanji variants is used within all three documents, the same character is mostly used in the manuscript and the first dictionary, while its variant character is used in the final one. And in cases where a set of Kanji variants is used within each document, numbers of set of Kanji in the manuscript are larger than those in the first dictionary, which are larger than the numbers in the final dictionary.

This paper shows that writing /printing methods affect character sets used in documents.

(みよし・あきら)